

聖書 イザヤ33章17〜22節、ローマ書6章1〜11節

私たち信仰者には、自分が召されたのちに、天国で「信仰の友」や「愛する者」と再会するという希望があります。それはイエス・キリストに結ばれているがゆえに、キリストを仲介者として天国で再会することが約束されているからです。ただ、天国では単に再会するだけでなく、地上における人生の歩みがどのような神の導きによって形成されてきたかを再会の時に共に語り合うことができるのです。キリストに結ばれた者だからこそ、地上での歩みがどのようなかたちで神の導きによって形成されてきたかを語ることもできるのです。そのことによって、私たちは地上における人生の歩みを本当の意味で総決算できるのです。その総決算を自当にしているからこそ、私たちはこの世の人生を意味あるものとして歩むことができるのです。もし、死によって最後には何もかもなくなってしまうと考えるならば、この世で生きていくための勇気も希望も決して生まれてきません。

確かに死んでしまったら自分の肉体も意識もなくなります。ですから、死によって人間存在は全くの無に帰してしまうと考えることも可能かもしれませんが。死ねば人間として存在していないのですから、存在していない死者が生きている人間とかかわることはできないと考えることもできるかもしれません。天国で信仰の友や愛する者と再会した時に、人生の総決算として自らの人生に刻まれた神の足跡を語りあうことができるという希望があるからこそ、死者は生きている者とイエス・キリストを介して関係を取り結んでいるのです。また、この世にある時に、たとえ洗礼を受けていなくても、イエス・キリストによって天国で再会することができます。死んだ者は既に天国で先に召された人たちと自分の人生の総決算を済ませているので、私たちが召されていたときに、神の導きがどのようなかたちで自分の人生に刻印されていたかを知る導き手となってくれるのです。ですから、一般には召された人を追悼する際に、死者は生きている者の記憶の中に生きていると理解しがちですが、天国では神の導きがどのような形で成されたかがイエス・キリストの執り成しによって明確にされるのです。そのことが古来から「最期の審判」という厳しい言い方でなされてきたことです。このようにして天国では信仰の友や愛する者と再会するのですが、その際に地上で生きていた時の神の導きが最終的にすべて解き明されることで最後の恵みが信仰者に示されるのです。先週の礼拝後に、70周年記念事業の委員会が初めて開かれましたが、教会史を編纂する意味もそこにあるのです。教会がどのようなかたちで神の導きを体現して来たかを振り返り、確認する作業が教会史の編纂作業です。ただ単に教会の歴史をまとめるわけではないのです。そこには神の導きに生かされた信仰者の痕跡が残されているのです。私は牧師としてこれまで多く信仰者の葬儀を行ってきましたが、その際の説教では、その信仰者の方にどのような神の導きが与えられてきたかを語るように心がけてきました。私たち信仰者は神の導きに委ねて生きているわけですが、自分にとってどのような神のみ業が現わされてきたのかを自分なりに、生きているときに総括しておくことも必要となるのです。ヨハネ福音書9章冒頭で、生まれつき盲人の人の「目が見ないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」と問われて、イエスが『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現われるためである』とお答えになった記事を思い起こしていただきたい。どんな辛い境遇でも、そこに神のみ業が現わされ、導きがあるのです。

召天者記念礼拝や墓前礼拝は、この世で生きている私たちが天に召された者たちを想起する営みです。ただし、単に生きている者が死者を悼むためのものではないことは以上の説明で理解していただけたと思います。生きている者が愛する死者を想起することで、その愛する者に示された神の導きを確認するのです。死という関係断絶の現実を乗り越えて、互いが神にあって硬く結ばれた者同士であることを確認しつつ、その人と自分に、人生の歩みの上で神の栄光がいかなる形で示されたかを確認するのです。墓参りはある意味生きている者が死者をケアする行為ですが、キリスト教信仰における召天者記念礼拝では、死者が生きている者を生かしていることにも目を向けるのです。実は、私たちの多くは、この世で死者と離別した悲しみを抱きながら生きています。死者に対する悲しみを抱かないで生きている人は基本的にいません。私たちの人生は

死者を視野に入れることで、先に召された先達たちに示された神の導きを想起し、同時にこの世での自分に対する神の導きの一つひとつを見い出す作業へと招かれているのです。それが現実生活で生きる勇氣や気力、意味を与えるのです。

ローマの信徒への手紙6章1節以下では、まず、罪の問題を取り上げています。この罪とは端的に言えば神や隣人との関係断絶のことです。関係を断ち切るころから憎しみや怒りが生じることはしばしば私たちが経験することです。ところが、キリスト・イエスに結ばれるための洗礼を受けることで、それらの罪に終止符が打たれ、関係断絶の中で罪に陥っていた古い自分は死ぬのです。そのことをパウロは『わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られた』（4節）と言っています。それは神の導きのもとで新しく生きていくスタートラインに立つことができたしるしでもあるのです。そして、イエス・キリストが初穂として復活してくださったことによって、死者は復活して『新しい命に生きる』（4節）者とされたのです。つまり、天国にはキリスト・イエスと硬く結ばれて『新しい命に生きている死者』がいるのです。また、この新しい命に生かされている死者によって導きが与えられ、生かされている私たちがこの世にいるのです。それは私たちもまた死を乗り越えて復活されたキリスト・イエスに結びついているからです。

ただ、「新しい命に生きている死者」というのは形容的には矛盾しています。私たちがこの世で生きていくからといって、天国にあつて神の右に座している方たちを死者というのはいかにもおかしいことです。死者というのは生者の側からの一方的な呼び名です。キリスト・イエスが復活後、昇天して神の右に座するという道筋を開いてくださったことで、死者は復活者となり、今は天にあつて聖徒となっているからです。神の懷に抱かれて新しい命に生きています。仮に命人（いのちびと）と呼んでもいいわけですが、もう死者は死という惨めさの中にはいないからです。天におくた方々は、復活した後

に神によって新しい命に生かされている命人なのです。

青戸教会墓地の墓碑に記銘されている方々はもちろん、いまここに参列している者にとつて今は天にある大切な人と、私たちはいずれ再会する定めにあります。プログラムにも「天国での再会を期して」と記しました。しかし、それ以上に大切なこととして確認しておきたいことは、私たちが天にある命人によって日々生かされているということ。それは神の導きによって生きていく足跡を教えてくれているからです。私たちはこの世では生者として、さまざまに不安や苦しみと共に生きています。ただ、それは今は死者となった大切な人との関係が切り結ばないから陥っている側面もあるのです。私たちは目に見えるものや知覚できるものだけで自分という存在を形成しようとしがちですが、命人としての死者が、今生きている自分の親しい隣人として、神の導きを教えてくれているからこそ、私たちは命人としての隣人と出会い、語り合うことによつて、より深く真実な生き方へと招かれています。死者も生きています。キリスト・イエスにある新しい命に生かされていることを感謝したいと思います。

「こころの友」の最新号で中村佐知（さち）さんの文章を興味深く読みました。留学先のアメリカで結婚し、4人の子どもに恵まれた中村さんですが、2015年4月にまだ21歳の次女的美穂さんが末期癌になっていたことが判明。中村佐知さんは中学生の頃から教会に通っていてクリスチャンになっていましたから、美穂さんの病気を「神さま、なぜですか」と何度も何度も神に問わずにはおられなかったそうです。その悲しみは今なお消えたわけではないけれども、少しずつその形が変わってきたと言います。中村さんは言います。「娘の闘病生活を通して私が教えられたのは、神さまは私たちがどんな苦しみを通るときも共にいてくださること、そして、神さまがくださる恵みは、必ずしも私が望むことと一致するとは限らないけれど、それでも信頼するに足るものであるということでした」と語っています。目の前の現実を見れば、恵みとは程遠い。でも、今ここに、神さまがいないのではない。さらに中村さんは言います。「在宅で治療を受ける美穂のため、毎朝スープを作るのが日課になりました。野菜を刻みつつ、神さまに思いのたけを注ぎ出す大切な祈りの時でした。美穂のベッドサイドにひざまずき、肺に差し込まれたカテーテルから浸出液（しんしゅつえき）を抜く作業は、神さまの守りと憐れみに感謝してささげる聖なる儀式のようでした」と言っています。癌の宣告から亡くなるまで11カ月間だったそうです。それでも、体の辛さが、増す中でも美穂さんは身近に、また世界で起きている出来事に気を配り、特に苦しむ人々のために祈り続けました。その様子を見て中村さんは、神さまが美穂さんを最後まで愛し、育ててくださったことを実感したそうです。

す。そして、2016年3月5日、自宅のベッドで激しく吐血する中、家族に「あなたたちを愛している」と力をふりしほ
るように叫んで美穂さんは息を引き取ったのです。この中村さんは最近ヘンリー・ナウエンの「死を友として生きる」と
いう本を翻訳した方ですが、そのナウエンによれば、人は自らの死を通して、地上に残していく者に最大の贈り物を手渡す
ことができると言っているそうです。そのことを中村さんはその本の解説で「病に伏す娘をケアすることは、私たちから彼
女への贈り物でしたが、同時に彼女から私たちへの聖なる贈り物でもありました」と書き記しています。このとき経験した
娘との深いつながり、そして共に仰いだ神の愛のまなざしが、今も中村さんを支えていると記事は締めくくられています。
このことを本日の文脈で言い換えるならば、病の床にあっても神の導きを感じ取って召された美穂さんが、母親の中村佐知
さんの現在の悲しみの中にあっても、神の導きがどのようなかたちで示されているかを語りかけていると言えるのではない
でしょうか。私たちも、天にある聖徒たちから、神の導きに彩られた人生に早く気づくようと呼びかけられています。

【祈祷】

全能の神よ、この世からあなたのもとに召された聖徒たちのことを想起しています。洗礼と信仰によってキリストに結ば
れた者が、その復活にもあずかっていることを固く信じて歩むことができるように導いてください。キリストは死者を復活
させるとき、私たちの惨めな体を主の栄光の体と同じ姿にしてください。また、召された私たちの兄弟姉妹、また愛す
る者たちは地上にある時、神の導きのもとにありましたので、今は天にあるすべての人があなたのみ国に受け入れてくださ
っていることを心から感謝するものです。私たちもまた、いつの日にか、そのみ国であなたの栄光にあずかり、天にある信
仰の友や愛する者たちと再会を果たすことができるように、この世の旅路を守り導いて下さい。召されたとき、あなたは愛
する者たちとのしばしの別れを悲しむ者すべての目から涙をことごとく拭い去ってください。人生の節目節目において
あなたのみ業が現わされた恵みに心を留め、神であるあなたを素直に仰ぎ見て、キリストに結ばれた新しい命に生きること
ができるように導いてください。私たちの救い主であるイエス・キリストによって祈り願います。